

決意の木 ～センター試験1か月前に～

いよいよ本格的な冬が来た。小さかった頃は雪が降るとなぜかうれしくて、布団の上を無闇にはしゃぎ回っていた事を思い出す。いつの頃からか、冬は春を待つための忍耐の季節のように感じられるようになった。かすかな陽の光や身震いするような冷氣、ふんわりと積もった雪が青白く発光する様や、沼や池が氷の平原に姿を変えてしまう外界、赤々と燃えるストーブを囲んで家族が団欒している家の中のぬくもり等を感知する瑞々しい感性が失われてしまったせいかな、と自分の年を寂しく数え直す。

さて、今、まさに瑞々しい感性の真っ只中を生きている本高生に、特にこれからセンター試験等の大学受験に立ち向かおうとする3年生に、本荘高校同窓会から2mの樅の木がプレゼントされた。模試を終えた3年生たちが昇降口に車座になり、センター試験まであと50日となった11月29日にその木を「決意の木」と名付けて、一人一人が決意をしたためのプレート結び、電飾を灯す点灯式が行われた。



(写真提供 由利写真館)

「苦悩を突き抜けて歓喜に至れ」ーロマン・ロランは「ベートーベンの生涯」にこう書いている。歎びは、見通しのきかない長く息苦しいトンネルを一人で歩き抜いた先に、光のように降り注ぐ祝福であるに違いない。トンネルの暗さを知らない者に、光のまばゆさやぬくもりは感じられない。

春には全員が笑顔で集い合おうという遠藤学年主任の激励に、生徒代表が力強い誓いの言葉で応え、それぞれの決意が結ばれて電飾に灯がともった時に、BGMに合わせて期せずして起こった大合唱が3年生一人一人の決意を一つに溶け合わせたように感じた。あの歌は、あの場に居合わせた者の心を静かに、強く励まして、きっと志望を達成するのだという決意を更に深くする感動的なイベントとなった。

不安や焦燥感に苦しめられている者もあるはずだが、それぞれの辛さを抱えながらも懸命に自分の課題と向かい合っている一人一人が、そうであるが故に他人の苦しみを理解し、共に目標へ向かって進んでいこうと心が一つに溶け合った瞬間を共有することができた。

闘いは孤独だ。誰かが自分の代わりにこの課題を背負って苦勞を引き受けてくれることはない。目標に到達するまでの戦略を立て、作戦の遂行を自分がすべての責任を持って行わなければならない。持てるすべての知恵を絞り、力を結集させながら、にじり寄るように前へ進む。そういう体験を積み重ねることのできる本高生は幸せである。それが人間としての骨格を作り、少々のことではへこたれない粘り強い精神を鍛える。

そうした仲間達が集う本高においては、闘いは、孤独であると同時に、大学受験という同じ目標へ直向きに取り組んでいる者たちに共有される厳粛な鍛錬の場である。

一人一人の決意が結びつけられた「決意の木」は、根を張り、枝を広げながら毎日成長し続ける。本高生よ、本高で学び得た誇りと力を持って、思うさま枝を伸ばし、高く、高く伸びていくことだ。新しい年にもまた。